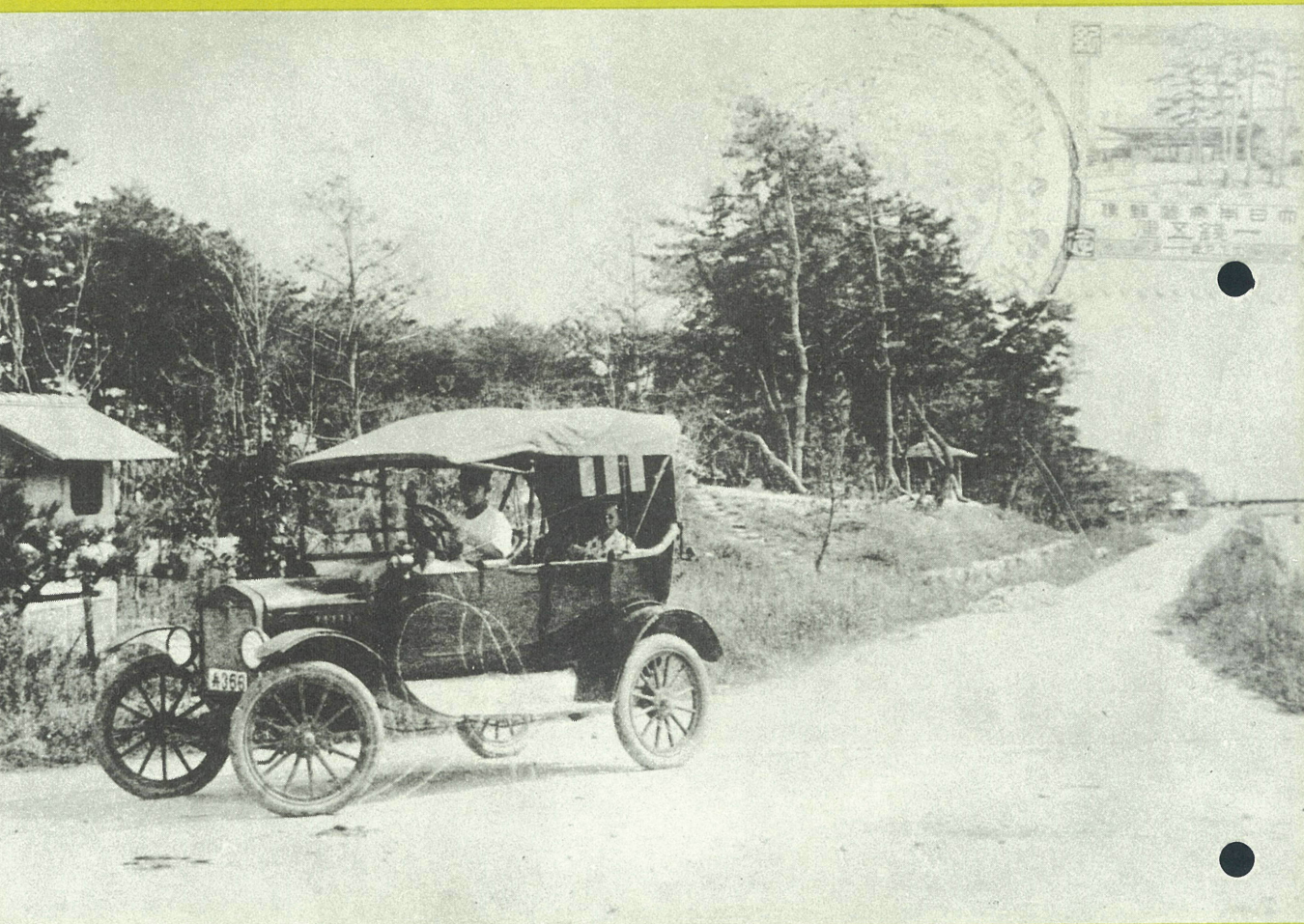


広報 あしや

'68
第5号
每学期発行

小学校3年生～中学校3年生用



ていぼう
なりひらばし
大正10年ごろ、芦屋川堤防に行く芦屋に1台だけあったタクシー。いまの業平橋付近で

特集 芦屋 この100年 2

みなさんの声を 5

みんなで考えよう 「自然」について 6

社会科訪問 神戸港のコンテナ基地 8

芦屋 二の百年

ことしは明治百年にあたります。もう少ししくわしくいいますと、十月二十三日は、日本が「明治」という年号にあらためてから、ちょうど百年になるのです。そこでわたくしたちは、このさい「芦屋の百年」をふりかえってみようではありませんか。わたくしたちの祖先の努力のあとをふりかえり、さらにこれからのあゆみをみんなて手をとりあつて、一歩一歩、着実に進めていきたいものです。



明治時代の精道村の風景

「芦屋市」になるまで

いうまでもなく芦屋は、明治のそのころから、いまの芦屋市というなまえではありませんでした。

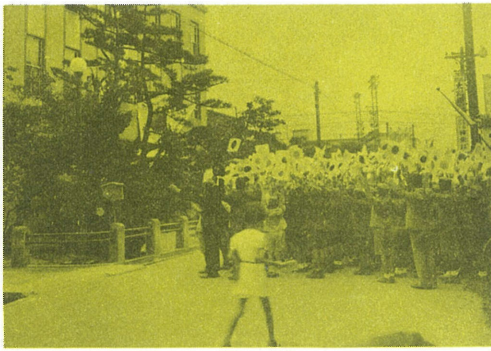
明治元年（一八六八年）、現在の芦屋市域になっている打出村と芦屋村は、兵庫県にいられました。明治四年の廢藩置縣によつて、三条村や津知村などの属していた尼崎藩が尼崎県に変わり、ついで、この尼崎

県は廢止されて新しい兵庫県がおかれました。廢藩置縣というのは、このように、すべての藩をやめて県をおき、政府がきめた知事がこれをおさめることです。わたくしたちの郷土が市になるまでのなまえたつた「精道村」は、明

治二十二年、市町村制の実施で、打出村・芦屋村・三条村・津知村の四つが合併してできましたが、この村のなまえは精道小学校のなまえからとつたものです。そのころの役場はいまの精道小学校の敷地の中にあつたのですが、大正十二年に精道村役場のりっぱな新庁舎（左写真）がで



きあがりました。この建物は、いまも市役所の北側にありますから、知っている人が多いでしょう。さて、精道村がいつそくとびに市制をして、「芦屋市」になつたのは、昭和十五年十一月十日でした。いま、全国に五百六十四の市がありますが、芦屋は百七十三番目の市と



市になったのを祝って行なわれた旗行列

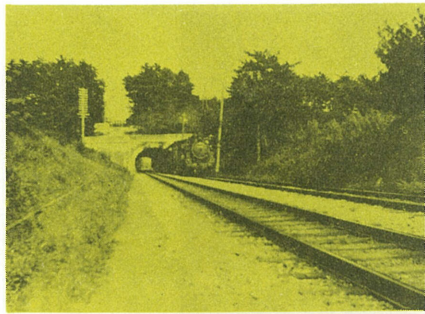
して誕生したの
 です。当時の人
 口は四万一千九
 百二十五人、家
 の数は八千百四
 十七戸と記録さ
 れています。
 十一月十日に
 は、二十八周年の市制記念日をむか
 えます。いまでは、芦屋に住んでい
 る人の数は六万四千六百四十五人で、
 世帯数は二万七千八百一十六世帯と、
 多くなっています。

精道村が芦屋市になったことを伝える当時の新聞

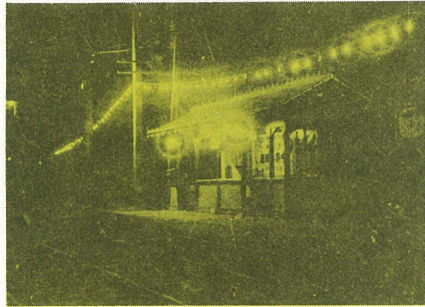


住宅地としての発展

大阪と神戸との間に鉄道が開通し
 たのは、明治七年のことでした。い
 まの東海道線ですが、芦屋に駅がで
 きたのはずっとあとになります。芦



芦屋川の下を走る国鉄



電灯でうかがふ阪神の芦屋駅

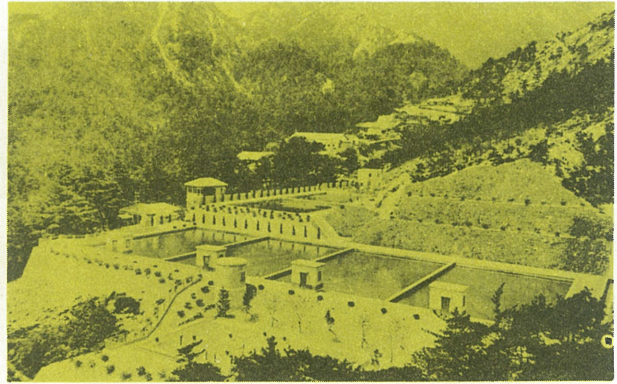
屋から乗れる電車で、一番早かつ
 た阪神電車は、明治三十八年に開
 通して芦屋・打出の二つの停留所
 ができました。おじいさんやおば
 あさんの話を聞きますと、そのこ
 ろおべんとうを持って電車の見物
 に出かけたといっています。米一・四
 キロ(一升)が十五銭で買ったこ
 ろですから、一区六銭ほどの運賃
 を使うのはもったいないと西宮や
 神戸まで歩いたということです。
 明治四十一年に電灯がつき、大
 正元年にはガスも使えるようにな
 ってきた精道村は、めぐまれた環



大正九年に開通した阪急電車

境の中でこのこ
 ろから急速に住

宅地としてひらけました。精道村時
 代で、もっとも大きなできごとは、



昭和13年にできた精道村浄水場(いまの奥山浄水場)

二年十カ月かかって
 昭和十三年に完成し
 た「村営上水道」の
 建設でした。これを
 村の費用だけでつく
 ったのですから、み
 なさんは、精道村の
 財政がたいへんゆた
 かであったことがお

わかりでしょう。

いつぼう、よごれた水や雨水を捨てる下水道も、上水道工事とだいたいの同じころからつくりはじめていたが、これはやがて戦争のために資材がたりなくなつてきましたので、やむをえず中断しました。

このようにして、住宅地として必要な施設がだ



▲まだ砂浜が多かった芦屋の海岸（戦前）
◀芦屋の浜でのいわしあみ（大正時代）
▼人力車と、名所だった潮見桜（大正時代）

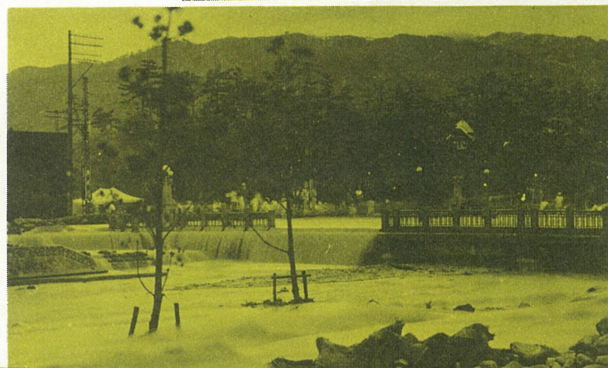


んだん整い、家もふえて住宅街がたちづくられていくのとならんで、大正元年に芦屋郵便局が、翌二年に国鉄の芦屋駅ができました。さらに大正三年には電話の交換事務がはじ

まり、九年に阪急電車も開通して芦屋川停留所ができました。昭和にはいつて、二年に阪神国道（二号線）と国道電車が開通し、また、芦屋警察署が同じ年にできました。

水害、戦災、復興

住宅地として発展してきた精道村も、昭和九年と十三年の風水害では大きな被害をこうむりました。それまでも、たびたび暴風雨はありましたが、とくに昭和十三年、阪神間をおそつた大風水害は下の写真のような



住宅は芦屋川を中心として、まず阪神芦屋駅のあたりから建ちはじめましたが、やがて山手方面にのび、ひきつづき打出方面、あるいは宮川の上流へとひろがり、昭和四年からは六麓荘のあたりが開けはじめました。

◆昭和十三年の大水害のもよう。上は芦屋川の業平橋付近、左は松ノ内町の駅前通り。

すごいもので、精道村は、このために市になるのがおくれたほどでした。芦屋市になった翌年の昭和十六年ごろからは、あらゆる面で第二次世界大戦の影響



明治十九年建築の精道小学校の校舎

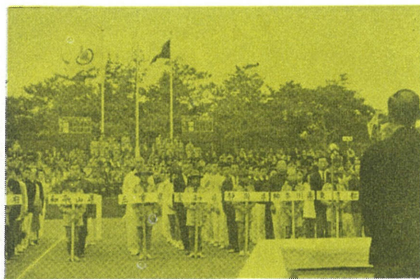


をうけはじめ、終戦の年の昭和二十一年にあつた数回の空襲では、市民にもたくさん犠牲者が出ています。また、家は四十パーセント、学校は実に八十パーセントが焼けてしまつたのです。

ではここで、学校や幼稚園の歴史をふりかえつてみましょう。まず、芦屋小学校と打出小学校が明治五年に開校しています。芦屋小学校は精道小学校のことで、明治十九年に現在のなまえになりました。精道小学校が百年をむかえるのも、もうすぐ

昭和三十一年、第十一回国民体育大会のテニス競技が芦屋庭球場で開かれたのです。その後、学校はたびたび合併をしたり

なまえが 変わつたりして いますが、 いまのな



昭和三十一年、第十一回国民体育大会のテニス競技が芦屋庭球場で開かれた

四十四年、宮川小学校は昭和元年、宮川・山手・岩園幼稚園は九年、山手と岩園小学校は十二年にそれぞれできました。戦後の芦屋の復興はまずこれらの学校を建てなおすことからはじめ、最近では、市立芦屋高校（三十七年）と小槌幼稚園（三十九年）が新しく加わりました。

明治から百年。この年は「あなたがたの、これからの百年」がはじまるときでもあるのです。

九月八日の選挙で、わたくしがふたたび芦屋市長をつとめることになりました。芦屋市を一つの家にたとえれば、市長というのはおとうさん役で、どうすれば六万五千人の家族が

気持ちをよくらせるかをいつも考え、早く必要なものから順

に、市の職員といっしょにやっていくのがしごとです。

芦屋を理想的なまちにするには、まだまだしなければならぬことがあります。わたくしは、二十一世紀

みなさんの声を

芦屋市長 渡辺 万太郎



の意見を聞き、参考にするつもりです。みなさんがたは、次の二十一世紀の日

本をせおう人たちです。みなさんの郷土「芦屋」をも

つとすばらしい都市にするいい考えを思いついたら、ぜひわたくしに教えてください。



山手中学校から見た芦屋の夜景と埋め立てをする海面

あさ

今回は「自然」について、みんなで考えましょう。そこで、八月に奥山の青少年野外活動センターであった中学生キャンプに参加した人たちのうち、精道中学校と山手中学校の六人から聞いた感想や意見をまとめてみました。また、野外活動センターのカウンセラールと芦屋水練学校の先生にも、話しあってもらいました。

朝がたに雨が少し降ったから、思うように火がつかず煙で涙がぼろぼろ出る。なれないことばかりで、おおいに苦心した。

テントの中がうつすらと明るくなってきた。鳥のなく声が聞こえる。午前六時起床、気温二二・五度。ぼくたちは、そう快な山の空気をぞんぶんに吸いこんだ。体操をしてから朝食の準備にとりかかる。あいにく

ぼくたちは考えた。どうして、こんなに苦心したのにそれが楽しいのだろうか。それは、自然の中でおおぜいのともだちといっしょに、しまりのある協同生活のよさを身に

よう

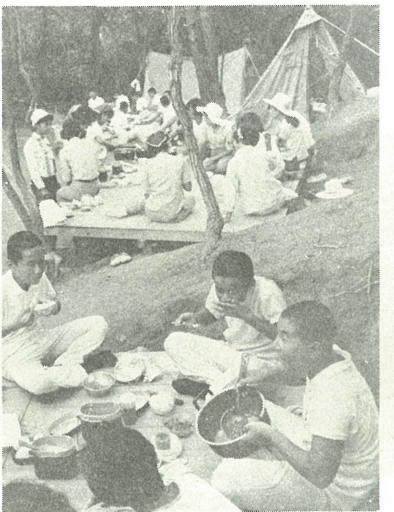
『自然』について



気温三十度。だが、木陰にすわっているとき吹きぬけていく風は、カラッとしていて涼しい。大きな木々がそびえ緑がふんだんにある。すばらしいと思う。ぼくたちは考えた。もしも、自然が失われるようなことになればどうなるのだろうか。ある程度の開発はしかたがないかもしれないけれど、いっぼうで計画的に植樹をするなど、必ず積極的な自然の保護にもとりくまねばならない。開発は、むしろ手あたりしだいにやるのではなく、自然を生かした開発を考えられるべきである。ハイキングコースや野外活動センターの整備でさえ、できるかぎり、自然の姿を保ちうるようなものであってほしいと思う。

つけることができるからだと思う。

ひる



山のきれいな空気の中でたべる食事は格別だ

対談

この対談は、毎月発行している「広報あしや」八月号にのせたものからまとめました。

中村隆一さん（大学二年、野外活動センターのカウンセラール）奥山の野外活動センターは、この夏に開いたばかりですけれども、芦屋独特のキャンプ場にしたんです。原始的なキャンプで、規律のあるきちつと



よる

山の中の暮れ方は早い。夜のファイヤー大会を最後に、楽しかった一日が終わろうとしている。このキャンプ生活をとおして、おおぜいのともだちと親しくなれてよかった。午後十時就寝、気温は朝起きたときと同じ二二・五度。

太陽とみどりと広場は、人間が生活していくうえになくてはならないものである。その太陽がばい煙でくもり、川や海がよごれ、みどりが

少なくなっていくことを、よく新聞やテレビで見聞きする。自然は人間がいなくても存在するけれども、人間は自然なくしては存在できないと思う。だから、芦屋のこのめぐまれ



午後10時就寝。風が、大きな木々のこずえをならして吹きぬけていく。

た自然環境は、みんなで守り育てていくべきではないだろうか。ぼくたちは考えた。芦屋に住む人たち自身が、あんがい、地元の自然環境のよさ、そのありがたさを忘れかけているのではないかと。大阪湾はよごれて海水浴もできなくなりました。芦屋の山は山の中とはいつもだいたいぶん開けてきている。そんなことで、もつと広大な自然にひかれる人たちも多いかも知れぬ。けれども、芦屋の人が、こんなに身近かある自然にとびこまないのもつたいないことだ。

〈自然〉についてあなたはどう考えますか。それをまとめて、芦屋市精道町七一六 市役所公聴広報課あてに出してください。

した伝統を、いまからつくっていくたいと思っています。

井上治巳さん（大学三年、芦屋水練学校の主任教師）自然に親しむ人口をふやしていくという点では、ぼくらの立場はいいしよです。水練学校の目的は、選手を養成することではなく、一人でも多くの人が泳げるようにということなのです。

中村さん 自然の中での肌と肌のふれあいは必要ですね。

井上さん 同感です。そして団体の和というものを学んでほしい。水練学校は市民プールで開いています。が、やはり海でやっていたときの方が親密感があります。

中村さん やはり自然ですね。でも、山へ行くのは市外の人が多い。

井上さん 芦屋の環境が、それだけ人をひきつける条件を備えているのでしよう。市民も、もつと地元の人自然に接してほしいですね。

みんなて"考え



◀精道中三年 井口雄二くん

◀精道中二年 小松俊英くん

◀精道中二年 中村裕二くん

◀山手中二年 志賀義俊くん

◀山手中二年 久保成夫くん

◀山手中二年 田中庸介くん

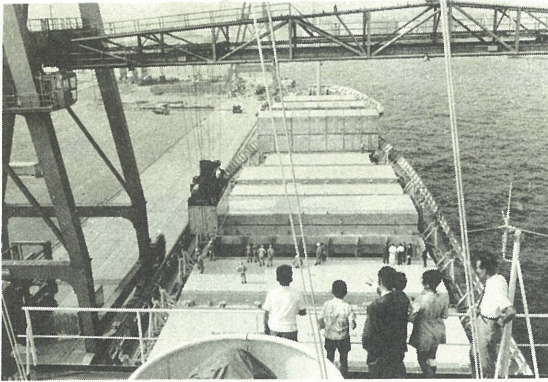
◀山手中二年 田中庸介くん

◀山手中二年 田中庸介くん

◀山手中二年 田中庸介くん

コンテナ輸送って、どういう輸送方法なんだろう。それを知らるのがこの見学目的だ。ぼくたちは見学の前に、コンテナというのが「運送する荷物を入れる、軽い金属で作った箱」であるということを知った。

ぼくたちは神戸港摩耶ふ頭の第四突堤にあるコンテナ基地へやって来た。突堤の両側には大きな貨物船が五、六せき着いていて、荷物の積みおろしをしている。半数は外国船で、知らない国の旗をあげた船もある。その中で、



大きなクレーンで船に積みこまれるコンテナ

ひときわすばらしい新しい船は丸が目を引く。箱根丸に続いてつくられた世界で二番目のコンテナ専用船は、完成したてのま

つさらの船だ。ぼくたちが訪れると、コンテナ会社の人と船の航海士さんが、船内を案内してくださった。

船の操だ室から船積みを見た。変わったかたちの運搬車がコンテナを運んでくると岸ぺきにある高さ五十メートルの大クレーンが船へ積みこむ。一つ積みおろすのに三分もかからない。つぎつぎ積みおろすのを見ながらいろいろお聞きした。

一つのコンテナはどれくらいの大きさですか？

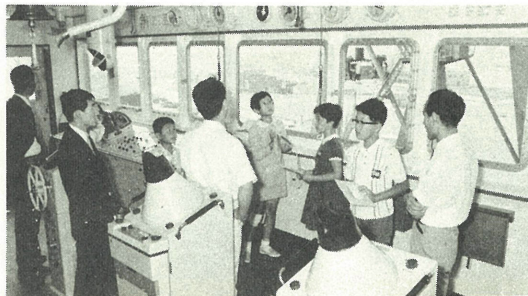
「たて二・四メートル、よこ六メートル、高さ二・四メートルで、九畳じきのへやほどの大きさです。この船にはそれが七百五十二こも積めます。コンテナには一つ一つが冷蔵庫のようになっている、食料品用のものもありますよ」

—中には何がはいつているのですか？

「神戸からはテレビやラジオ、織り物などを積んで外国へ運んで行き、帰りは牛やぶた、レモンなどを積んで来ます」

社会科訪問(第5回)

神戸港のコンテナ基地



操だ室で説明を聞く(岩園小6年柳田くん・浅井さん・5年砂川くん・黒住さん)

—では、いろんな商品をどこでコンテナにつめるんですか？

「生産工場にはコンテナづめの設備をもっているところもあつて、そこからは商品のつまったコンテナがトラックで運ばれてきます。このふ頭にコンテナづめをする施設があります」

—コンテナ輸送のよい点は？

「いちばんよいのは、時間と手間がはぶけることです。いままでは一つの荷をたくさんの人がかついで積みおろしていました。コンテナにすると、形、大きさが決まっています。運搬車とクレーンの運転手、監と

くする人、の三人だけで早く荷役ができます。そのうえ、荷くずれの心配がなく、雨の日も荷役ができるし、品物もいたみません。こうしたよい点がたくさんあるので、さいきん、コンテナ輸送がふえてきて、コンテナ革命とよばれています」

(でも、ここに問題はないだろうか。たとえばコンテナ化によつて、今まで港で働いていた多くの労働者が職を失うのではないか。港と工場を結ぶコンテナを運ぶ道路がそこまで追いついていないのではないか)

説明を聞いているうちに、丸が初めて航海に出る時間がせまってきたので、ぼくたちはひとまず船からおりてとなりの突堤にある上屋を見に行つた。上屋というのは、荷を一時いれておく倉庫だ。学校の校舎よりも大きいそう、中は柱が一本もなく、荷の出し入れがしやすいようにつくられていた。

船のそばへもどつてくると、丸が出航するところだった。初めての航海だということで、プラスチックやおおぜいの人々に祝福されて岸へはなれていった。これからは日本と外国の間を行き来して、活やくすることだろう。